

第14回 「ことば」フォーラム

ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？

2003年3月15日（土）

中目黒GTプラザホール

菅井 英明（国立国語研究所）

権島 忠夫（元大阪府立大学）

西原 鈴子（東京女子大学）

李 明姫（新羅大学校／東京学芸大学）

ランディー・スラッシャー（沖縄キリスト教短大）

杉本 明子（国立国語研究所）

後援 目黒区・目黒区教育委員会

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（吉岡 泰夫） お待たせいたしました。国立国語研究所，第14回「ことば」フォーラムによろこそおいでくださいました。今日は「ビジネスや留学に生きる言葉の力とは？」というテーマで，6人の先生方のプレゼンテーションと，それから，最後に質問コーナーを御用意いたしました。4時までよろしくお付き合いいただきたいと思います。それではさっそく，最初に国語研究所の所長甲斐睦朗が御挨拶申し上げます。

甲斐 本日はあいにくの雨の中ですが，その雨も春を迎えるような雨になっております。その中をこうやって国立国語研究所の「ことば」フォーラムにおいでいただきありがとうございます。おかげをもちまして本日はほぼ満席になるところであります。非常にありがたいことだと思っております。いろいろと今日のフォーラムの開催について，いろんなところに助けていただいている次第です。また，本日は，プリントに書いてありますように，四つの会社あるいは団体，日本言語テスト学会の協賛についても，私ども感謝いたしておるところであります。国立国語研究所は昨年度から独立行政法人ということになりました。その段階で，もっと国立国語研究所の存在を皆さんに知っていただく必要があるとともに，何をしているのかということについてもっと知っていただく必要があるのではないかという反省をいたしまして，一昨年度から1年に5回，「ことば」フォーラムを開催いたしております。本日は今年度の第5回目になるわけであります。幸いにも「ビジネスや留学に生きる言葉の力とは？」というテーマで，今日は外部の先生方の御協力をいただいております。樺島忠夫先生は文章の問題について非常な激務の中をこうやって今日はお話ししていただくということになります。また，3人目の李明姫先生は幸いにも今日本に来ていらっしゃるということで，韓国のビジネスマンの日本語力について貴重なお話をさせていただきます。また，休憩をはさんだ後では，ランディー・スラッシャー先生は日本人の英語力について，私どもが一番欲しいところについて今日お話しただけ。そして，その全体の案内を国立国語研究所の菅井英明が行い，また，結びとしては，研究所の杉本明子がヨーロッパの言語テストについて御説明するというかたちになっております。今日，司会をするのは国立国語研究所の上席研究員の吉岡泰夫であります。どうぞこれから4時までですが，よろしく御清聴いただければと思います。

司会 それでは講演に入ります前に，今日お渡ししました資料の中にアンケートが入っていると思いますので，それはぜひ御記入いただいて，後で受付のところにお渡しいただきたいと思います。では，さっそく最初の菅井の担当に入ります。「言葉の力とは」というテーマで国立国語研究所の菅井英明がお話し申し上げます。よろしくお願いいたします。

【言葉の力とは】菅井 英明

（配布資料：p. 2～5）

菅井 皆さん，雨の中をお越しいただき，まことにありがとうございました。国立国語研

究所の菅井英明と申します。私のほうからは本日のフォーラムのテーマであります「ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？」というのは、一体どういうことでこのようなテーマを選び、どういうことが問題になっているのかということをお話しいたしまして、私の後で御講演いただきます先生方の御紹介および先生方がお話しくださるテストの概要について触れさせていただきます。言葉の力とは何なのかということについては、様々な定義をすることができます。まず、何もないと考えることも難しいでしょうから、言葉の力について考えるための切り口として次のような例を御覧ください。二つ文がありますが、1番目は「晩ご飯はうなぎがいいです」という文ですね。その次が「スポーツは体がいいです」ということなんですけど、一見、「何々は何々がいいです」というところは全く同じなんですけれども、二つ目のほうは、これは何かおかしいですね。本当は「スポーツは体にいいです」ということを言いたかったのしょうから、助詞の選び方がこの文の場合は間違っているということが言えます。もう一つの文を御覧ください。例えば、ある方が「一体何回言えば分かるんですか」といったふうに問い返す。「ああ、4回です」というのは漫才ではありそうですけれども、もしある方が相手を非難するような口調でしゃべっていた場合は、恐らくここでは謝るということで、「すみません」というような表現を使うのではないのでしょうか。もう一つ御覧ください。皆さんはドリアンという果物を食べたことがあるかどうか分かりませんが、このような会話はどうでしょうか。「ドリアンってどんな果物?」「うーん、皮はとげがあって実は甘くて白くて……」と、こういうふうにドリアンがどんなものを言葉で描写をまずする。それでも見たことがないという人にとっては、「うーん」としか言いようがありませんね。見たこともなければ味わったこともないので、これはイメージは湧かないんですが、そこで、見たこともない方も分かるように、既に知っているものになぞらえて、「いやあ、クリームみたいなやわらかさで、アイスクリームのような甘さなんだよ。匂いは納豆みたいだと言われてるけどね」と言えば、どうでしょうか。皆さんも少しイメージがお分かりになるでしょうか。いま三つほどの例を見ていただきましたが、ここにきれいに言葉の力がどういうものであるか、ということが分かります。まず、初めの例は文の構造ですね。文の構造がどういうものであるかというのを判断する力があります。その次の例は、文は正しいけれども、それがどんな場面、状況で使うべきかというのを判断する力です。そして、一番最後なんですけれども、話したこと、あるいは書いたことをどのような方法で伝達すれば分かっていたかということをお話するものです。言語学という分野では応用言語学というものがございます。応用言語学のほうでは言葉の力というものは、大まかに言えば今のような三つの力であるというふうに言われております。そして、なぜこのような言葉の力があるのかと言えば、言葉を用いて特定の状況において特定の目標や目的を達成するためにこのような手段が使われるのだろうと言われております。今私は言葉は特定の状況において目標や目的を達成するためにある、とい

うふうに話しましたが、では、私たちが24時間生きている中で、言葉を使う場面や状況というのはあるわけですが、その中でどのようにして言葉の力がある人はこういうことをして、ない人はこれができないということを見ることができるのでしょうか。例えば仕事をするのに必要な語学力というのはどうやって見ることができるのでしょうか。仕事をする場面というのはたくさんございます。会社の中、事務室、打ち合わせ、電話の応対など無限にあるように思われます。それから、今話しましたが、言葉は目標、目的を達成するためにあると言いましたが、その目標、目的というのも無限にあるのでしょうか。相手を説得する、相手の共感を得る、効果的な発表をする、内容の伝わる文章を書く、同僚にぐちをこぼすというのものもある意味で大切なことだとは思いますが、このように無限にあるのでしょうか。言葉の力というものに関心のある研究者たちは、このように一見無限にある場面や状況というものを丹念に観察しまして、また、この場面や状況の中で、言葉話を話している人間がどのように話しているのかというものを丹念に観察してまいりました。そして、いろいろな言葉の力を知るための手法というものをじっくりと作り上げてきております。本日はビジネスや留学という、言葉が使われている場面や目的が比較的イメージしやすい状況を例にしまして、これらの状況の中で生きる言葉の力とは一体何なのか、私たちはそれをどうやって知ることができるのかということをご一緒に考えていこうと思っております。それでは、本日これから御講演いただく先生方は、それぞれビジネスや留学の目的で作られましたテストを素材にお話しくださいます。そのテストがどのようなものであるのか、その概要の御紹介と、これから講演いただく先生方のお名前を紹介させていただきます。まず、私の次に御講演いただくのは樺島忠夫先生です。樺島先生は日本語文章能力検定についてお話しくださいます。日本語文章能力検定協会が1997年に実施を始めたテストで、受験者の文章に対する能力を、内容把握能力・構成能力・表現能力・作成能力という四つの観点から判定する検定試験です。試験は年に3回の実施で、級別に分かれております。「1・準1級」というのは一つの試験なんです、「1・準1級」「2級」「準2級」「3級」「4級」、そして、「5～7級」となっております。受けたい受験者の文章能力に合わせて自分で級を選べるというのが特徴になっています。受験者数は2002年度には2万人を超えております。各級によって検定に出る出題分野は違うのですが、例をとりますと、「1・準1級」では、通信・報告・小論文の構成、文章の推敲、論説・提案の文章を書く、などの分野から出題されております。その次に御講演いただくのは西原鈴子先生です。西原先生は日本留学試験を素材にお話しくださいます。日本留学試験は、日本の大学に留学を希望する外国人の、大学等で必要となる日本語能力および基礎学力の評価を行う試験です。2002年度より年2回行われておりまして、日本国内と国外8カ国、外国なんです、8カ国で実施されております。日本留学試験の試験科目は、日本語、理科、総合科目、数学となっております。日本語の部分は聴解、耳で聴く聴解ですね、短い文章を読みながら、同時

にテープを聴く聴読解、読解、そして、小論文形式の記述から構成されております。試験が開始された2002年度には2回の試験で合計2万6000人ほどの方が受験いたしました。その次にお話をいただくのは李明姫先生です。李先生は勧告JPTというものでお話をくださいます。JPTは学問的な日本語の知識の多さを測定するのではなく、言語本来の機能であるコミュニケーション能力を測定することを目的としています。日本人と話しているという前提のもとに試験が行われ、高いコミュニケーション能力が必要とされる問題が提出されており、コミュニケーション能力の水準を評価することを目指しております。試験は聞き取りと読解から成りまして、すべての受験者が同じ問題を同時に受ける形式で、最高点は990点です。点数による能力評価表が公開されておまして、例えば880点以上取った受験者の能力は、「どんな状況でも的確な対応が可能ぐらい優れたコミュニケーション能力を持っている」とされています。試験はまた、社会的に認められて、有用性が高いというところがあり、韓国電力公社、韓国観光公社のような公的機関、あるいはロッテ建設、LG、電機のメーカーですね、などの会社でも新入社員の選抜テストとか、昇進のテストですとか、あるいは日本へ派遣したい、そういう人たちの選抜テストなどにも用いられております。その次にお話しくださるのはランディー・スラッシャー先生です。ランディー先生はTOEFLについてお話しくださいます。TOEFLは、アメリカの高等教育機関に入学したい、英語を母国語としない外国人の英語力を測定するために1964年に始められた試験です。また、この試験は大学入学以外にも各種の政府機関、奨学金プログラムなどにも成績が利用されております。アメリカのニュージャージー州にある民間団体ETSが実施し、全世界で毎年およそ85万人ほどの受験者がこの試験を受けています。日本では、最近新聞で御覧になった方もいるかもしれませんが、TOEFLのスコアで550点取ることが、現職の高等学校の英語教員に目標として課されるようになったことで知られております。現在のTOEFLの受験形式は、紙を用いて行う形式のものと、2000年度から導入されたコンピュータを用いて受験する方式の二通りがございます。いずれの形式でも、リスニング、構文・文法問題、読解問題、小論文から構成されております。そして、最後の講演は国語研究所杉本明子研究員です。杉本研究員は、ヨーロッパで各種行われている言語テストを標準化しようという取り組みのアルティマー・フレームワークということについてお話しします。ヨーロッパでは、各国で様々な言語テストが作成されているのですが、その国それぞれで内容やレベルが異なっております。ALTEはこのような異なるテストの内容を比較して共通の枠組みを決めるヨーロッパの言語テスト実施・研究の共同機関となっております。それでは、これらのテストから私たちはどのようにして言葉の力を知ることができるのでしょうか、また、これらいろいろな側面から、どのような言葉の力に関する物事が浮き彫りになっているのでしょうか。それでは、会場の皆さんとこれから勉強をしていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございます。では、続きまして「日本人の文章力」というテーマで大
阪府立大学名誉教授の樺島忠夫先生にお願いいたします。よろしくお願いたします。

「日本人の文章力」 樺島 忠夫

(配布資料：p. 6～9)

樺島 樺島でございます。私の知り合いに俳句を作っている、作っているというだけでは
なくて、何かの会を持って指導しているという人が何人かいます。また川柳のほうの指
導もしているという人もいます。それから、和歌を作っている人もいます。私の教え子
がA4の紙3枚ぐらいに俳句を、こんなのを作ったから、読んでくれと言ってくると
もあります。大変迷惑な話ですけども、ファックスで送ってることがあります。で、
思わぬところに、私の大学の教え子から手紙、葉書をもらうと、後ろのほうに和歌が書
いてあったりして、えっ、この人が和歌を作るのと思ってしまうんですね。考えてみま
すと、私の家内の母親も俳句を作っていたな、と思い出しまして、日本人というのはな
んと短詩形、短いかたちの文学をつくるのを好むのかと思っている次第です。学校の作
文では何を書かせてきたかという、大体が感動したことを書け、という指導なんです
ね。感動したことを書けという先生自体が感動するような生活をしているのかという、
私はあやしいと思っているんですが、そんなに感動することというのはまあ、余
りない。そうしますと、貧しい生活をしている子供が苦しい生活を書くとか、例えば私
の子供のころには豊田正子さんの『綴り方教室』というのがありまして、東北の貧しい
生活、近所の夫婦げんか、そういうものを書くんですね。近所の人は大変迷惑したと思
うんですけども、それが映画になりました。私は今大阪の枚方市というところに住ん
でおりますが、その枚方にも、男の子ですが、「綴り方兄弟」という3人の子供がいまし
て、それも映画になりました。枚方で団地を建てる時に、その建築現場に行くと、ク
ギなどを拾って売って生活をしているという、大変かわいそうな生活が内容です。教科
書を見ますと、「お母さんは魚売り」という文章が教材に出ているんですね。お母さんが
朝早く起きて魚を仕入れてきて、寒いところを魚を売って回るという非常に感動的な
ことが書かれていて、これを見習って作文を書きましょう、とあるんですね。そうしま
すと子供たちが、うちは残念なことに貧乏ではない、豊かなほうだ、また、惜しいこと
に家庭円満である、作文に書くことがない。そういうことになってしまいます。作文教
育では感動させることと、思ったこと、考えたことを書きなさいという指導が行われ
たようです。俳句は5, 7, 5, 17文字ですね。和歌、短歌は31文字です。その中
に事柄、気持ちを押し込めて書かないといけないわけです。そうしますと非常に象徴
的と言いますか、内容を短い言葉に詰め込んであり、しかもその理解をする人の知
識とか経験を共有している人でないと理解できないというかたちの文章になります。
それを一般の書く文章に持ち込まれると非常に困ってしまいます。例の1、これは公
務員が書いた文章ですが、「所得水準の向上や労働条件の安定などによって生まれて
くる、生活の時間

的、精神的ゆとりを十分に活用し、これからの生活を楽しむための一つ的手段として、旅のあり方をここで考えてみたい」。こういう長い文を書くんですね。頭の中にあることを全部こういうふうにつなげてしまうんです。それから、コンピュータとか機械のマニュアルの文章です。ほとんどの人はコンピュータを買ってもマニュアルを読まないという人が多いようですが、専門家同士でしか分からない。俳句みたいなものですね。知識や経験があれば分かるという文章です。日本人の多くはこういう短い言葉の中に多くの内容を詰め込んで書こうという傾向があるのではないかなと思います。そういうふうにして短い文の中に内容を詰め込んで書こうとすると、自分が書こうとする事柄を分析して、いくつかの段落を設けて論理を分けて書くと言うことができないことになってしまうんです。この例は、日本語検定の2級を受けた人が、(2級というのは大学の卒業生の力を要求するものですが)、こういうことを書いているんです。現代において、様々な情報社会の多様化は不可欠なものである。しかしそれと同時に、情報をどのように選択して、自分のニーズにあったものだけを選択することが必要ではなかろうか。個人情報が多様な形で流通していることにも、注目しなければならない。簡単に買い物ができる、インターネット上のショッピングは、楽しく、便利である反面危険が背中合わせにあることを、忘れてはならない。一旦、情報が流通すると、我々の手でそれを防ぐことは、むずかしいと考えられる。それは悪質な商品、悪質な業者だってあるのだ。画面上での判断では、難しい事が多すぎるのではないだろうか。私個人としては、いくつかの店をまわったり、あるいは、旅先で見つけた物にこそ愛着を感じるものである。個人情報が流れる危険、ショッピングの問題、これがごちゃごちゃになっているんですね。情報化社会の問題点、個人情報流通の問題、ショッピングの問題、これらをきちんと分けると言うことができないんですね。ビジネスとか留学に必要な文章能力ということですが、今の我々の情報化社会の中では、我々はたいていの情報をテレビとか新聞とかの報告によって得ています。これらがもし事実を伝えているのでなければ、我々の判断がすべて間違ふことになってしまいますね。ですから、教育においては、まず、最初に事実を客観的に伝えるという能力を身につけなければいけない、ところが、たいていの人は事実と自分の感想、考え、推論を交ぜて書くという欠点を持っている。学校では考えたこと、思ったことを書きましようという指導をしていますが、出来事を客観的に書くという指導はほとんどやっていないわけですね。それからもう一つ、これはもう俳句、和歌を作ることに関係して申し上げましたが、文章を書くにあたっては、相手に連絡しようとする内容を十分に分析して表現する必要があります。十分に分析するという場合には二つの問題がありまして、一つは5W1Hですね。^{だれ}誰が、何が、何を、誰を、どのように、なぜ、という、こういう情報を伝えるときに必要な要素を落として書いてしまう。しかも自分がよく知っていることほど簡単に書いてしまうということが人間の心理として起こってくるんですね。ですから、専門家が書いた文章が分からないというのは、もともと一つ

は5W1Hを分かっていることとして省略してしまうことが一つと、もう一つは、書こうとする、または伝えようとする内容を十分に分析して、分かりやすく述べるということが必要ですけれども、それをしない。それから、3番目として、他人によく分かる表現と組み立てによって書くということですね。それができなければ相手にうまく伝わらないということになっていきます。学校では文章を書くために必要なスキルは教えてないわけです。先ほど言いましたように、感動することを書けというだけですね。私は神戸の中学校の研究会へ行きますと、いろいろなコンクールに生徒の作文を入賞させているという先生の研究発表を聞きました。彼は、「私は子供たちに感動したことがあれば書け、感動したことがなかったら書かなくてよろしいと指導しています」と言ったので、私は「それは指導じゃない。ほったらかしだ」と言ったところ、自分がこれだけコンクールに入賞させているのに何を言うか、と、大変に不機嫌な顔をされました。このように、スキルの指導が全然できていないのです。アメリカの教科書などを見ますと、時間がありませんので、くわしくは述べませんが、まず、どういうことを書くかということを決めて、それをいくつかのトピックセンテンスで表せ、ということが述べられています。トピックセンテンスを立てて、そのトピックセンテンスをくわしく書いてパラグラフをつくれ、日本語で言うと段落にあたりますね、そういう段落をいくつか積み重ねて文章を構成しろという指導です。そういう指導を小学校のときからやっているようですが、日本では、私が国語の教科書に関係するときにそういう方法を提案したら、そういうことをすると感動が薄れてしまうからだめだという先生がおられたんですね。きちんと構成を設けて書くということを日本の先生はどうも嫌うようです。私は日本語文章能力検定を設立する計画に参加したわけですが、絵を見て、そこに何が描かれているかを客観的に書いてもらう。想像したことを書いたら点数をやらない。そういう問題を5級から7級のレベルで行っております。物語的なアニメを出すんですね。そうすると、それを見て物語を作ってしまう。そうすると^{高い}零点。どこでどういう人間がどういうことをしているかというふうなことを、その文章を見て、元の絵を描けるような文章を書いているとよい点数を与えます。それから、文章の中の5W1Hをわざと省きまして、この文章の中で足りない言葉を補えという問題を出しています。日本語のように主語がなくてもいい、述語があれば文法的に文句がないというところでは、文法的なしばりがないものですから、非常にルーズな文を書いてしまうわけです。ですから、主語、目的語というような必要な部分が欠けているところは、それを補うという問題です。それから、複雑な内容を一つの文の中に詰め込んだ長い文を示し、これを短くて、分かりやすい文の集まりに直すという問題を出しています。段落を設けて書くという意識を持ってもらうための問題。条件に適した手紙文を書く。意見・論説文を書く。こういう問題を検定問題として出題しています。意見・論説文の問題としては、4級では、事実をきちんと述べて、それに次の段落でそれに関する意見を述べるというものです。二つの

部分からの構成の文章を書かせるのです。それから、3級では、その後ろに自分の意見が正しいことを論証する部分を設ける。準2級では、さらにその論証の一つの形式として、最後に、異なる意見を挙げて反論する、こういうきちっとした構成をした論説文を書いてもらうということを行っております。採点をする文章の評価ですけれども、加点項目を設けて、こういうことを書いたら、よくできたといって点数をあげましょうということで、出題の意図にあった内容、意見の明確さ、論を進める上で、独自／適切な知識・経験を生かしているか、論理の展開は妥当であるか、文章の構成がはっきりしているか、こういうところを見まして点数を与えます。この加点項目と共に減点項目を設けて、表記の問題とか、語句の使用とか、文の構成の欠点とか、そういうもので減点をする。そういうように加点項目と減点項目とを振り分けて行っております。できるだけ客観的な採点がしたいと思うわけで、採点者の訓練も必要になります。先ほど言いましたようにアメリカなどでは、文章の書き方を小学生から教えている。日本ではあまり教えていないですね。ですから、向こうに留学しても文章を書かせられると全然書けないということになってしまう。私は『文章術』と『文章表現法 五つの法則による十の方策』（どちらも角川書店刊）で、日本だけではなくて世界に通じる文章の書き方というのを解説したつもりでおりますので、もし、できましたら、お読みいただければ幸いです。以上で私のお話は終わります。ありがとうございました。

司会 樺島先生、どうもありがとうございました。それでは、続きまして「外国人の日本語力」というテーマで、東京女子大学の西原鈴子先生、お願いいたします。

「外国人の日本語力」西原 鈴子 (配布資料：p. 10～16)

西原 西原でございます。よろしくお願いいたします。今樺島先生からお話があったことを、私は、そうだそうだとお聞きながら聞いていた一人です。特にヨーロッパ、欧米、北米から来る留学生たちが一様に嘆くのは、日本人の話は文法的には分かるんだけど、結局、何を言っているのか、よく分からない。日本人の日本語を理解するためには、頭の構造を少し変えていかないといけないんじゃないかというような疑問が生じていたりするわけです。樺島先生がおっしゃいましたように、言葉づらだけを理解したのでは、その人の言いたいことは理解できないのが日本人の日本語の特徴だというふうに言われることが外から見てあるということですね。そのことを踏まえて、外国人がどういう日本語を身につけて、日本の大学、高等教育機関で学術的に目標を達成することができるのかといのは、実は大きな課題であるわけです。そこから私なりの話を始めたいと思います。レジュメの13ページをお開けいただくと、いま画面に載っているようなイラストがあります。丸に菱形のようになっているところですが、それを見ていただきながら話を聞いていただくと、むしろ分かりやすいのではないかと思います。画面には話が出てきますけれども、これがお役に立つのではないかと思います。私の話は日本留学

試験というものです。今年度から日本の高等教育機関、中でも大学に留学を希望する人たちが日本の大学で勉学をまっとうするのに必要な日本語力を測定するという、そういう目的でできた試験のお話をいたします。留学生の大学生活というのは、大学での講義を聞く、文献を読む、レポートを書く、実験するというような学術的な活動はもちろんですけれども、その他に、衣食住その他の日常生活も日本語を使って行うわけですから、その二つの側面が必要だと思います。大学生活というのは、日本に来る場合には多く日本語を使ってするわけですけれども、自分の考えを相手に分かってもらい、相手の考えを理解するという、そういう意思の疎通をするための言語的スキル、それから、学術的知識ももちろん日本語教育の学習項目になります。この学術的な知識というのは、日本語の文法を知っているとか、伝達の目的に合った日本語が使えるかどうかということではなく、例えば科学を専攻しようとするものの科学の知識、文学を専攻しようとするものの文学という学問領域に関する知識のことです。高校生に対して大学受験のときに学科の試験を課しますが、その知識は、もちろん日本に留学するための前提になります。ですから、日本の大学に留学を希望する場合に、日本語能力という場合には、学科の知識というのは当然前提になって、それを活用して日本語を運用するという側面を総括的に含まなければ日本留学のための試験ということにはならないわけです。先ほど菅井さんのほうから御指摘いただいたように、日本留学試験というのは、日本語という部分のほかに、理科3科目、数学、それから、社会科学一般にあたる総合科目から成りたっております。日本語試験という場合には、専門分野の知識を持っているかどうかということ、数学、理科の3科目、総合科学で測定されるということになりますので、日本留学試験の日本語試験能力というのは主としてそうでない部分という、これを測定するということになります。ここで測定される日本語力スキルとしては、生活スキルと、それから、学習スキルというふうに考えます。そして、そのスキルの部分に非常に強く傾斜した試験を日本語の部分で、日本語試験ということになります。よく四技能と一般的に言うような、聞く・読む・話す・書く、そのほかに、自分の母語から日本語に翻訳する能力、頭の中で切り替える能力と言ったほうがいいかもしれませんが、そういう能力も当然問うことになります。しかし、いわゆる表出能力といわれる話す能力とか、それから、翻訳する能力というのは、ペーパー・アンド・ペンシル・テストの制約がある関係上、問うことはなかなか難しいのです。先ほど記述問題があると言いましたけれども、主として読む・聞く、書く、そして、一部翻訳するというような能力を持っているかどうかを測定するのが、日本に来ていただけるかどうかを測定するための試験ということになります。今度は留学生に、どういう能力が求められるかということなんですけれども、ここに四つのことを申し上げたいと思います。一つは、情報の流れを全体的にとらえることです。例えば1時間話を聞いて、あの教授は一体どういうことを言っていたのか、大枠をいくつかのポイントとしてノートに取れるかというような、状況の流れを

全体的にとらえる能力です。第2は、批判的に理解する能力です。あの教授はああいうことをお話くださっているけれども、ほかの部分は一休どうだったのか、自分にはちょっと分からなかったとか、あそこは少し反論の余地があるのではないかというふうな、そういう理解の仕方ができるかどうか。これは大学生であれば当然こういうふうにするだろうという前提に立って、要求するわけです。第3は、選択的に理解するということです。樺島先生のお話にも、大筋をとらえる、論理の流れをちゃんとするというようなことがありましたけれども、例えば私も、学生を相手に1時間話をする場合に、多分寄り道、道草、冗談、それから、少し休憩というような、論理の遊びというのを加えて、1時間で学生にポイントのいくつを分からせるということをするわけです。その場合に、学生の側で言いますと、それを選択的に理解する。つまり、先生はあっちこっちで寄り道したし、冗談も言ったけれど、言いたいことはこのポイント五つだというふうに理解できるかどうか。これは大学生が講義を聞く技術、またはノートを取る技術ということになるでしょう。第4は、推測しながら情報を分析することです。先ほども出てきましたけれども、教師はいつも論理的に必要なことだけを話すというわけではありませんから。ですから、大学の講義の場であっても、話の裏にこういう意図が隠されているのだろうかとか、こう言っているけれども、恐らくこうなるべきであったのだろうかというようなことを考えつつ理解するということが必要になってきます。アカデミック・ジャパニーズ、つまり学術的に必要な日本語の能力を言語の活動としてとらえる場合にはそういうことになるのではないかと思います。次にお話するのは、ニーズということです。留学試験を受けてもらう前提としては、大学生にはどういう言語能力が必要とされるのだろうかということを申しましたけれども、今度は留学生の側に立って、日本の大学に一体何をしに来るのだろうか、日本の高等教育機関で勉学をしている留学生が一体どのような生活の中で、どのような日本語を使いながら、どの程度のレベルの日本語を話せることが必要なんだろうか。研究領域によっては、英語の助けが可能であったり、数式とか実験とか理解できれば、文学系の人のように非常に精緻な日本語を理解しなくてもいいという領域もあるかもしれない。どのようなことが優先されてこの人の留学生活があるんだろうかということをあらかじめ調査して、または調査する側が推測して、決めるというニーズ調査ということがあります。一方で学習レディネスということが入ってきます。レディネスというのは準備が整っているかどうかということになるわけです。準備状況というのは、何かができるかできないかということだけではなく、どのくらい勉強するのだろうか。つまり、アルバイトをしなくていいのだろうか。それから、学習時間、講義は何単位取るのか。どういう状況で日本語を使うのだろうか。日本人とどのようなコンタクトがあって、日本語の実践としてはどういうことがあるのだろうか。日本語について助けてくれる人がいるのだろうか。そのようなことが留学生になろうとする人のレディネスの問題、個人的な準備状況の問題というふうに考えるこ

とができるわけです。そういうことをいろいろ勘案しまして、留学生試験というのは、アカデミックな生活がどういうニーズとどういうレディネスの上に成り立っているのかということデータを、その部分を大きく包み込むようなかたちでテストするというようになっております。先ほど菅井さんから御紹介がありましたように、今年度既に2回テストを実施し、今年度、来年度に向けての入学試験の一部として、入学希望者はこの試験を受験しているということになっております。試験というのは、御存知のように、どんな大学の入試でありましても、大学側が可否の判定をするわけですね。ですから、何点まで取ってればどの大学にでも入れるということは考えられない。ある大学はここまで、ある大学はここまでというふうに、大学のほうが決めるということになるわけです。日本留学試験は今年度から始まったと言いましたけれども、実は従来からも一つの試験がありました。日本語能力試験というのですが、これは世界中で30万人ぐらいの人が今年も受けた試験なのです。同じように外国人の日本語能力を測る試験なんですけれども、日本語能力試験のほうは、今後は一般的な勉学の達成度を測る試験ということになるのではないかと思います。そして、留学試験というのは、より留学生の生活に直結した試験としてこれからも関わりあっていくということになるかと思われまます。14ページを開けてくださると、そこに二つ、実際に今年度の試験を公開問題として市販しているんですね。今日たまたまスポンサーをしてくださった出版社ではなく、桐原書店というところから公開用の問題がCD-ROMと一緒に出されています。これを御覧くださると実際にどういう問題が出ているのかということが分かるようになっていきます。私が今から読む文章を聞きながら、ちょっと例題を読んでいただけますでしょうか。この四つの図を見ながら正解を選んでいただくというのが聴読解の試験ということになります。聴読解という言葉はちょっと耳慣れないかもしれないんですけども、皆さん方が例えば私の話を聞きながらノートを取る、あるいは私が示す図を見ながら講義を聴くというようなことをお考えくださると、読みながら聴くということを同時に行うというのは、大学生の生活では結構ありうることなんですね。そういうことで聴読解という試験があります。そういう部分があるということになります。ちょっとこれを見ながら聞いていただけますでしょうか。「IT技術の進歩によって、情報の発信者と受信者のあり方も様々に変化してきました。IT技術の革新によってもたらされた大きな変化の一つに、情報の双方向化ということが挙げられます。これまで、情報というと、新聞やテレビなどの媒体を有する比較的資本の大きな企業から発信され、私たち個人がそれを受信するというものでした。この発信受信の流れは一方的なものであったわけですが、IT技術の発達によって、ここに大きな変化があらわれました。一方的に受信する側だった受け手が、自ら発信する手段を手に入れ、企業に向けて発信する側にもまわり、しかもそれが容易に行えるようになったわけです」。今の先生の話を図でまとめるとどの図になるだろうかというのが試験の問題です。ということになるわけです。皆さん正解

できたでしょうか。まあ、こういうような問題が聴読解の試験です。1ページめくってくださると、これは読解でございます。一般的に私たちが大学に入るときに受けたような読解の問題というのは、長文を精密に読んでいって、作者の言わんとするところを、紙背を読むというようなことがあって、入学試験作成の立場にまわりますと、悪文でなければ入試の問題として適当でないというようなことを言われて、あ、そういうものなのかと思ったんです。読解行動というのは、駅の料金表を見ながら切符を買うというのでも、実は読解行動になるわけです。例えば、新入生に向けて図書館の館内ツアーというものが掲示されていたとすれば、下の1, 2, 3, 4のことを理解するわけですけども、それで、どの理解が一番いいのだろうかということをご自分で読み取ってもらいたいというのが読解の例ということになります。私たちが留学生に期待する、生活スキルと、それから、先ほどの実際に講義を聴くというようなことの中で行われている学術的な聴読解行動というような、そういう能力をあらかじめどの程度持っているだろうか、学習者がどの程度準備ができているかを問うていくのが、日本留学試験が要求する日本留学のためのアカデミック・ジャパニーズということになっております。日本の大学が世界的に学術的な貢献をする時代がまいましたので、先ほど言った日本語ができるということと学力があるということの兼ね合わせで、どういう人に日本に留学してほしいかという、両方を兼ね備えている人が一番いいわけですけども、そうじゃない場合もありえます。そのときに、前提とする学力はあるんだけど、日本語のスキルがまだ追いついていないという人に来てもらう場合には、アカデミック・スキルを前提にした日本語力を日本へ来てからどういうふう身につけてもらうかということが課題になるわけです。それが大きな課題だということをご最後に申し上げて、話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 西原先生、どうもありがとうございました。それでは、続きまして「韓国ビジネスマンの日本語力」というテーマで李明姫先生、お願いいたします。

「韓国ビジネスマンの日本語力」李 明姫 (配布資料：p. 17～20)

李 李明姫でございます。西原先生は「外国人の日本語力」というテーマでしたが、まさに私の日本語能力が対象になるのではないかという気持ちで、ちょっと冷や汗をかいているところでございます。よろしくお願いいたします。「韓国人ビジネスマンの日本語力」という、韓国社会で行われているJPTテストについてお話したいと思います。韓国のJPTテストの特徴について五つの点についてお話ししたいと思います。JPTテストというのは、学問的な日本語の知識ではなく、コミュニケーション能力を測定するテストですけども、その中で主に、日本での生活の面とか、また、ビジネス上の業務が日本語が理解できる、そういう二つの面を測定するテストなんです。次に、受験者の正確な日本語の実力評価についてですけども、このテストは二つに分かれているんです。聴

解テストと読解テスト。聴解テストではスピーキングの能力、読解テストではライティングの学習評価をるところなんです。3番目としては、コンピュータ分析を通じた問題の弁別力の検証というところになるんですけども、これは韓国国内の統計処理機関のコンピュータを通じた項目別の難易度や弁別度、妥当性等を測定して検証されているテストなんです。4番目の Conversion Table という項目ですけども、こちらは一人の受験者が様々なフォームの試験を見ても、自分の実力が変わらないという、いつも一定の結果が同じように出ているような役割をする、信頼性のあるテストです。最後に公正な試験の進行管理ですけども、これは出題機関が日本の学校法人駿台でございまして、韓国で管理されているところは…？…委員会、時事英語社で対応しているところなんです。こういう J P T テストの特徴が挙げられます。このテストの問題の構成や類型なんですけれども、先ほど申し上げましたように、聴解問題と読解問題があつて、八つのパートがあるんです。問題の項目は 200 項目があつて、時間は聴解問題で 45 分、読解では 50 分で、配点としては 990 点というふうになっているんです。問題は難易度が初級から上級まで一定の比率で配分されております。また、問題は全受験者に対して共通の問題が出題されているので、自分の能力が初級であっても、上級であっても、一つの試験だけがあります。また、ここでは合格とか不合格とか、そういうことは全くないのです。自分の日本語能力がどの程度であるかということが確認できると思います。これを日本語の能力試験と割合を考えると、1 級の問題が大体 19% ぐらい、日本語能力試験の 2 級にあたる問題が 28%、3 級では 30%、4 級では 23% ぐらいの配分として問題が出題されております。次に、点数別言語能力評価表になるんですけども、そちらは全部が 99 点の中に、880 点以上になると A になります。740 点以上になると B、460 点になると C、220 点にして D 以下になるともうコミュニケーション能力はほとんど不可能なぐらいになるんですけども、A、B、C、D にも書いておきましたが、日本語能力試験でいえば A にあたるのが 1 級、B にあたるのが 2 級、C にあたるのが 3 級、D にあたるのが 4 級です。どのぐらいの日本語能力であるかといえば、A は十分なコミュニケーションができる、B は日常的なコミュニケーションができる程度です。C は限られた範囲内ならコミュニケーション能力があるということです。D なら、ちょっと、限られた、最小限のコミュニケーションができるぐらいということになります。これは日本語につきましては、もしビジネス言語能力であると、A になると流暢なビジネス日本語が理解できる、話せるとか、そういうぐらいになるんです。ここまでが J P T の全体的様子ということになります。次は実際、J P T にはどんな問題が出されているかということを見るんですけども、もう 1 時間以上になって、もう皆さんが非常に集中力が落ちているところだと思いますので、皆さんも実際こういう問題を解いてみるという気持ちとして御覧になっていただけたらありがたいと思います。ここは写真描写問題なんですけれども、写真描写問題には実際にはフォトだけ、写真だけ出るんです。それ以外

のところはテープの音です。皆さんが見ればすぐ分かると思いますけれども、ここでは、受験者としては、生の日本語をテープで聞くということになると非常に緊張するんです。それで、こういう写真があると、ある程度視覚情報と聴覚情報がありますので、少し安定しながら聞けると思います。ここでは「おとこのこ」とか、「おとこのひと」とか、そう語彙が分かればある程度分かると思います。また、「うたをうたう」とか、「はなしをする」とか、そういうぐらいの語彙のレベルがありましたら、すぐ正解が何かということが分かると思います。非常にやさしい問題だと思います。これは正解はBですね。次の写真描写の問題ですけれども、前のほうは一人の人が出たので分かりやすかったんですけれども、こっちの写真を見ると、日本語能力だけではなく、写真をよく見ないとちょっと分かりにくいと思われましても、正解は何番になりますか。状況描写ということですね。デモしているようなそういう写真かもしれませんが、人がたくさん出てくる、そういう問題です。そういうときにはこういう人たちの共通点とか、違いは何かということを手がかりにしないといけないんじゃないかなと思いますけれども、ここには「たいそうしています」とか、「さんぽをしています」とは関係ないということなので、BとかCの中で正解があると思いますけれども、何だろうと思いますか。この辺になると、左の手をあげている人もいますので、そうすると正解はCになるんですね。「みんなて(手)をあげてこえ(声)をだ(出)しているようです」。こういった状況描写の問題も30%ぐらい。こういう写真の問題は、割と分かりやすいところではないかなと思われまします。また、残されている問題40%というのは、日本の看板や建物を見て、どういう問題かということなんです。こういった種類が写真描写問題として出されている問題です。次に質疑応答の問題ですが、ここではこのすべてがテープの音声です。さっきのものは視覚情報と聴覚情報があったので、割と安心できたんですけれども、聴覚になるとちょっと難しくなったんじゃないかなと思われまします。問題の例として、「このごろ具合はいかがですか」というところで、「はい、大変難しいですね」「すこし勉強しています」「はい、おかげさまで元気に過ごしております」「とんでもないですね」という四つの選択肢があるんですけれども、これは問いかけて、これは病人に対する質問です。そうすると正解はCということがお分かりだろうと思いますが、ここはですね、実際、聞き取り用の問題のみと思われているかもしれませんが、それだけではなくて、スキミングの能力も測定できる場所なんですね。このように簡単な会話の文章を通して文章の意味を把握して、瞬間的な判断を要求されている問題だと思います。こういうところまでが日本語の理解度を測定できる場所だと思います。次は会話文の問題です。会話文の問題になると、例ではA, B, Aとなっているんですけれども、ここはテープの音声で、次の下の「二人は何に乗って行きますか」というところと選択肢は試験紙に書いてあるところなんです。こういうテープだけではなく、こういう問題自体が試験紙に書いてある場合には、受験者のポイントとしては、先に、テープの音声を聞く前に選択肢をち

ゃんと見ておいたほうが割と分かりやすくなってくるだろうと思います。「時間がないですから、急ぎましょう」。「タクシーで行きましようか、それともバスで……」。「駅はすぐあそこですよ」というところですね。「二人は何に乗って行きますか」。「バスで行きます」「歩いて行きます」「電車で行きます」「タクシーで行きます」という、非常に分かりやすい…？…なんですけれども、…？…ますので、「駅はすぐあそこですよ」というところから「電車で行きます」というところになるんですが、こういうふう二人の会話を聞きながら、同時にこの会話が進行されている場面とか話の内容など、具体的な情報や事実を正確につかみ取る能力を要求されているところです。次ですけれども、次は説明文の問題です。説明文の問題は聴解テストに入るところなんですけれども、ここは上の部分がテープの音声です。下の部分は試験紙に書いてあるところなんですけれども、ちょっと読んでみます。「改札口を出てすぐ前の道を80メートルぐらい行くと、左手に小さな書店があります。その手前を左に入るとその道をしばらく行くと左側に薬局があります。そのとなりの青っぽい建物です。迷った時は、書店の向かい側の交番で聞いてください」という例文です。問題をちょっと読んでみましょう。例1「この人がこれから行く建物のとなりには何がありますか」という問いですね。あなたは正解は何だろうと思いますか。ここでは韓国人としてはちょっと長いかなと思うんですけれども、日本人からみると分かりやすいところかもしれませんが、正解はCです。実はこの問題自体が、出典はどこにあるかということなんですけれども、これはインターネット上にある問題を私が例として挙げました。資料の最後のところに出典を書いておきましたけれども、JPTの模擬試験集の中から、今の説明文の問題を、JPTのインターネット上の公開されているサンプル問題から出しました。この問題は、私は最初、正解はBだと思いましたが、こちらの国研の人と色々な話をして、日本人から見ればこれはCだということで、これは難しいと思われる問題です。実際、こういう音声と、またこういう問題が出ている、こちらの説明文の問題が韓国人の受験者としては一番難しいと言われているところなんです。ここだけで例として一つだけの問題なんですけど、実際にテープの音声があって、問題の数が三つか四つぐらいになるんですけれども、かなり難しいんですね。読解だけになると、割とクルー（手がかりのこと）があるから分かりやすいかもしれませんが、テープとこういうふう一緒に文字を見てという、両方情報を見てみないと分からないので、今回の場合もこういうふうな手順になる場合には、テープの音声を聞く前に、どういう問題が出されているかということ、早く見てみなければならぬ。速読の能力も必要だろうと思います。例としては割と短い文章ですけれども、実際のテストの問題になれば、これよりももっと長い文章も結構たくさんあります。今回はパワーポイントで見せるためだから、大きな問題はちょっと場所が足りずに、出せなかったんですけれども、長文聴解も付録問題にはありますし、一番難しいと思われることです。こういう説明文の問題は、会話文よりも結構難しいところであり、内容としては主に

日本の駅とか、観光とか、デパートなどの案内放送や、気象情報などの様々な情報案内とか、ラジオとかテレビのニュースやCMなどの説明文が主になると思います。ここまでが聴解問題の例だったんですけども、次は読解問題になります。語彙探しというところですが、問題を見てみると、「来年の会社の経営戦略をはかるために明日会議が開かれる」という、「はかる」という漢字はどういう漢字をあてるかということなんですが、こういうところでは仮名とか漢字の表記とか、また、同じ用法や意味に関する問題として構成されています。漢字の正しい表記とか読みをはじめ、文章の中での単語や語句が持っている用法の把握能力が必要な試験になっております。全部で 20 個の問題があるんですけども、後半になるほど難易度が高い問題があるんですね。前までは日本での生活上の会話で読解の能力ですが、ここでは割とビジネス的な語彙も少し入っているんです。JPTではビジネス業務上の専門的な知識ではなくて、ビジネス上の会話は理解できる範囲、その程度の語彙とか、そういうのが要求されているところです。そこでの正解は(C)ですね。次ですけども、誤文訂正の問題ですが、「日本へ留学に行けば大阪より東京のほうがいいと思いますが」という、そのこの四つの中から間違っているところをさがし出すという問題です。日本人から見るとすごく簡単な、やさしいテストだなと思われるかもしれませんが、実はこれは韓国語に訳すと、韓国語としては問題がない。間違っていることはない。どういうところかということ、「行けば」というところ、仮定表現ですけども、日本語としては「こうなら」「たらば」というのがあるんですけども、韓国ではそれを区別していないです。だから、韓国語として学習者が見たら、あ、これは書けないことはないからというところなんですね。難しいなと思うんです。こういうふうに韓国語としての表現は問題がないですけど、日本語としては間違っているというところの文法上の誤りを探すという問題の例です。こういうところになると作文の能力も必要になるわけなんです。だから、こういう文章全体の意味を把握するには、文法知識とか語彙力が要求されているわけです。次は穴埋めの問題です。「その中小企業はすごい。大企業___の黒字をあげているのだから」という問題ですけども、こういうところの語彙の「中小企業」や、または「黒字」とか、「大企業」とか、そういう語彙が問われているところです。正解は「大企業なみの黒字を」といふうになるんですけども、不完全な文章の中から、文の前後の関係を把握して、それで完璧な文章を完成する能力ということになります。文法や語彙や慣用句とか、そういう語彙力が要求されている問題だと思います。さっきの語彙探しのところとこちらとがビジネス的な語彙が書かれている例文です。次ですけども、読解文の問題になります。読解文の問題というのが、最初に問題が出てくるんですけども、結構長いですね。読んでみます。「君の早耳には驚くね。仰せのとおり、今度本社詰めに決定しましたが、実のところ、どうにも不安だ。なにぶん今まで地方詰めでのんきな暮らしに慣れてしまっているが、当然息を切らさねばなるまいと思う。何か重苦しい不安だけが先に立つ。が」。ここは、

とにかく、ちょっと間違っているところですね。「とにかく力の限り、大いに頑張るつもりではいるが、どうか、よろしく御助力を頼む。乱筆で失敬だが、まずはお礼まで申し上げます。御自愛のほど切に」。ちょっと難しいんじゃないかなと思うんですけど、日本人から見ても易しいかは分かりませんが、正解はBです。日常生活に使われている文字情報をどれくらい速く正確に把握できるか。速読が要求されている文章なんです。こういう問題では、受験者としては、いろんな不利があるけれども、絶対的に時間が足りないところなんですね。だから、ここでもかなりの上級のレベルで点が決められる部分だと思うんですけども、流暢な、Aぐらいの点を取りたいという人はこういうところに力を入れて、うまくしていかないと、と思うんです。こういう読解文の問題としては、主にポスターとか、案内状とか、説明書とか、手紙、新聞、雑誌などから出題される例が多いんです。とにかく、時間が足りない。今の例では割と短い文章だけ提示しましたが、実際には、これよりも何倍も長い文章が結構書かれている場合が多いんです。今までが読解テストということになるんです。大体これぐらいでJPTの実際の問題はどのような問題があるということがお分かりだろうと思います。実は私はJPTとどのような関係か、それは関係ないということになるんですけども、韓国で日本語を教えている、実際日本での留学経験は4年間です。韓国で日本語を教えているんですが、私が日本に留学したときは、日本語留学試験とかいう試験は全くない時代でした。今の人が、うちの学生たちもJPTの試験何点とか、何々取ったと言うから、今回だけJPTを調べる気になったんですが、どうして韓国ではこのようなJPTのテストがすごく利用されているかということなんですけども、最初の菅井先生からのお話で、企業体とか、公的機関とか、大学とか、高校までもが利用しているんです。どうしてだろうと思いつつながら、よく調べてみたんですね。普通の、日本での日本語の試験、留学試験よりも、JPTでは年7回の試験があります。だから、すごく受験者としては自分の都合のいいときにいつでも受けられるというのがあって、また、会社とか、企業体、団体では特別試験制度があって、団体として申し込むときは、JPTがその団体へ行って試験を行うこともできる、ということで、いつでもどこでも簡単にということができちゃいます。また、韓国の大学の入試が変わって、昔は年1回だったんですけども、それが今では年何回も入試があるんです。それで日本語能力試験とかはいつも12月ぐらいでしょう。それに点数もらって大学を受験するときに提出するのには間に合わない、絶対的に。そうすると、日本で行われている試験よりも、JPTはいつでも点数が認定されるから、すごく提出しやすいということがあって、それで学生、結構この試験を受けているんです。実はこれはビジネスマンの日本語能力試験なのに、大学生とか高校生だけが結構受けているというのは、そういう制度的な面もあるんじゃないかなと思いますし、実際どのぐらいということになると、それはインターネットの文章も書いておきましたけれども、2002年度まで平均的に年2万人ぐらいの人が応募している、と。実際使っている企業体は約

150 個ぐらいの企業体。大学では 2002 年度で 53 校ぐらい。大学のレベルによって 400 点から 800 点ぐらいまで。公開はしませんけれども、大学レベルによって受験するときとか。また、大学生になってからも、大学生の時は教養科目として日本語と英語があるんですけども、点数が何点以上であれば免除されるとか、そういうのもありますし、また、卒業するのに、点数何点ぐらい以上であるなら、試験も免除できるという制度があるんです。だから、非常にたくさんの受験者たちが日本語能力試験の成績を参考にしています。高校に、外国語を専門にする高校もあるんです。そういう高校に入ろうとしても、点数が何点以上なら入れるという特典がありますので、すごく頻繁にこういう学習者たちは J P T を利用しているということなんです。以上です。

司会 李先生，ありがとうございます。それではこれから 15 分間休憩に入ります。後半を 50 分から始めますので，1，2 分前に席にお戻りくださるようお願いいたします。それから，この会場に私ども国語研究所の刊行物を後ろのほうに展示しております。どうぞ御覧ください。それから，何か御用の方がいらっしゃいましたら，係の者は黄緑色の名札をつけております。どうぞ何なりとお申しつけください。
それでは，休憩に入ります。

< 休 憩 >

司会 それでは講演の後半を開始します。「日本人の英語力」というテーマでランディー・スラッシャー先生，お願いいたします。

「日本人の英語力」ランディー・スラッシャー (配布資料 : p. 21~26)

スラッシャー 休憩の前と後は二つの大きく変わることがあるんです。一つは言語が変わる。今までは日本語の試験でありましたけれど，今から外国語の試験に移ります。それからもう一つの私と李さんの大きい違いは，彼女はほんと日本語うまいですが，私は 43 年間日本に住んでいますけれども，ずっと英語を教えましたから，日本語なかなかうまくならないんです。特に今日手話の通訳する人は大変なことになると思いますけれど，ブローケン・ジャパニーズから通訳しなければならないんですけど，ちょっとの間，私の変な日本語を我慢して聞いてください。大事な部分はプリントはあるんですけど，多分意味は分かると思うんです。やっぱり，英語力でも言語力でもそうですけれども，目的は必要ですね。何のためにこの英語を習うのか。これは一番大事なことだと思うんです。それから，私の今日のお話は留学するための英語能力，そこを見たいんです。それから，英語能力は，はかることは一番大事です。どのような試験を使って，どのような試験問題を出すか。これはとても大事なことです。必ずどの試験でも同じような能力をはかることができるか分かりませんから，ちょっと小さい，短い，特に留学のための英語能力をはかった方法はちょっと見たいんです。初めは試験はありませんでした。ある先

生の試験。この人は英語能力がある人というような手紙だけでした。けれども、60年代、Ann Arbor というミシガン大学に事件が起きました。ある台湾からの中国人の学生は、ある先生から手紙がありました。この子は英語ができますよと書いた手紙を持ってミシガン大学へ入学しました。けれども、その学生は Ann Arbor という町、米国の中部のところへ行って、全然周りの英語が分からなかった。授業に出て、先生の話したことが全然分からなかった。パニックの状態になって、どうする、どうする。もう国に戻ることができないし、こっちはもう英語が分からないから、もうほんとパニック状態になって、この学生はミシガン大学のすぐそばのある教会へ入って、2ヶ月ぐらい隠れて。多分知っていると思うんですけど、米国の教会は必ず台所があるんです。台所から食べ物を盗んで。初めはネズミかと思ったけれども、ネズミは冷蔵庫を開けることができないから、どうしても分かった。もう2ヶ月ほど経って、この学生は捕まりました。もう大変な問題。どの新聞でも、米国全体の新聞にも一面のニュースになった。もちろん大学は恥ずかしくなって、ビザを出した米国の政府も恥ずかしかった。それからもちろん台湾の政府も同じでした。このようなことがもう一回起こらないように、やっぱりどうしようと考えました。ちょうどあのとき50年代はミシガン大学は英語教育の一番中心になったところでした。多分、私のような年配の人はミシガン・メソッドで英語を学んだかもしれないです。「This is a book」というような有名な、「リピート・アフター・ミー (Repeat after me)」のあれなんですけれど、面白いでしたね。あるミシガン大学院の学生、ロバート・ラドーという人は英語の能力をはかる試験、考えてくださった。彼の卒業論文のためにTAC (Test of Aural Comprehension in English as a Foreign Language) 論文というのがあって、ミシガンテスト、イングリッシュ・アンド・プロジェクトという試験が始まりました。これは1960年代です。それから、ミシガンテストの名前ですね。本当の大学はもう、個々の試験はなかったから、違いましたけれども、ちょっとミシガン、特にミシガンステートからライバルの大学はちょっと使いにくくなりましたね。たいてい兄弟で使い出した試験は、兄弟は使いたくないでしょ。このような問題があるから、やっぱり全国のベースで試験を作ったほうがいいと考えました。National Council on the Testing of English as Foreign Language の研究グループをつくりました。いろんなグループからメンバーが入って、それからのことなんですけど、留学生のための英語能力をはかる試験を開発しました。初めの試験は1964年。私、ちょうどあの60年代の初めはミシガン大学の大学生でした。それから、後で説明するんですけど、ミシガンテストのアイテムライターの仕事もしました。それから、TOEFLの初めの、1965年の試験問題を作りました。後は、TOEFLとは関係ないんですけども、初めのときだけちょっと手伝いをしました。でも、TOEFLといっても、TOEFLテストは今のと初めのと違うんです。ある部分は変わらなかったけれども、ある部分はちょっと変わりました。初めの試験は五つの部分がありました。リスニングという試験

もありました。この中は三つの部分がありました。一つは今でもあるシングルステイトメントのところですが、後で例題を出しますけれども、このシングルステイトメントの問題がある。それから、今でもあるんだけど、二人の人の会話の問題もありました。でも、リスニングの3番目の部分は、初めのほうは割に長いレクチャーがありました。それから、レクチャーについて質問がありました。それから12年経って、新しいかたちの試験を開発しました。リスニングの後のセクションは、ライティングという名前のセクションもありましたが、直接書くことではなくて、マルバツのかたちで、特にスタイルとかレジスターのようなことをはかった試験問題でした。それから、今でもあるストラクチャー、文法の問題。それから語彙の問題。それから最後に意味、コンストラクションの問題。でも、76年のときは今の三つのセクションが生まれました。ライティングの部分はなくなった。それから、リスニングは初めの1、2のほうは変わらなかったけれども、3番目は一つの長いレクチャーになって、短いアナウンスメント、または、説明のようなことは変わりました。それから、ストラクチャーと語彙は一つのセクションになりました。それから最後にリーディングは初めと同じで続きました。それから、つい最近、米国の場合は1988年、コンピュータでC B T (Computer Based Testing) というTOEFLになりました。けども、途中でTOEFLと初めは関係なかった二つの試験を開発しました。一つはTest of Spoken English、それから、もう一つはTest of Writing English。これは留学生のためにではなくて、別の目的でつくりました。特にスピーキングはそうです。スピーキングの試験は、米国の制度では大学院生は大学の入門コースの講師になるんです。そうするとだんだん海外から来る院生が増えましたから、やっぱり教えるときの話す力があるかどうかをはかる手段は必要になって、Test of Spoken English は大事です。それから、TOEFLは全部マルバツのかたちですから、ライティングの力が必要と思った大学もあったから、Test of Writing English も開発しました。でも、コンピューター形式になって、ライティングは入って、今のComputer Based Testは、前のマルバツの部分とTest of Writing English、両方入って一つの新しい試験になりました。それから、試験をします。2005年の予定したあれですが、「トーフル2000」という試験が出る予定です。これは名前どおりの試験なんですけど、名前を見ると分かるんですが、初めは2000年には出る予定でしたけれども、やっぱりものすごい大きい変化をするから、時間が足らなかったから、もう2005年に出る試験になりました。後でちょっと新しいところを説明しておきます。この英語を見ると今までの試験が分かると思うんですね。大体ミシガンテストの場合は文法の問題は40問ありました。このような簡単な会話を、「What is that thing?」「That ___ a spider」「That is called a spider」。このTOEFLでも同じような文法の問題があるんです。それから、語彙のほうは二種類があるんです。「It's too windy to go for a stroll」。アンダーラインの言葉と同じ意味を持つ言葉がここにもあるので、私もよく知った問題と思うんですね。

この場合は「stroll」と「walk」が同じ意味ですから、正しいのはd)ですね。ということです。それからもう一つの語彙の種類の問題は、空白に入れる適当な言葉を選んでください、というものです。Because of the storm and rough waves, it would be foolish to go out sailing today in a small_____。c)の「boat」以外は正しい意味ある文にはならないですね。それから、リーディングのほうは、これはいつもの文はもっと長いんですが、このような、「Spider」というのが入るための短いを選んで。それから、“read”のほうは、“red peace”になりましたから、ちょっと直してください。3行目の「little peace of read cloth」となって、“red peace”です。すみません。英語の間違いです。このことについていろんな質問をするんですね。「The person telling the story is」。 「My wife」というんですから、「a married man」。c)が正しいですね。このようなリーディングはTOEFLもほ同じような形の問題があります。それから、ミシガンテストと初めのTOEFLの違いは、ミシガンテストは初めからライティングがありました。この30分のエッセーは必要でした。このような時間で、だれでも何か書くことのできるような、トピックで、“Describe the most beautiful city you have ever visited.”。30分内で作文、それからAnn Arborで、ネイティブの人は採点して、それから、マルバツの100問の試験とエッセーの二つ合わせて一つの能力をはかっています。字は小さいですけれども、下のほうは、今の問題はこのフォームC、1964年のもの、下の小さいのを見ると、アップショー (Upshur, John) さんがテストのオフィスのヘッドでしたけれども、問題作成のチームは最後の名前…?…は私です。私は初めから試験の経験がありました。それから、TOEFLを見ると、ミシガンのほうはリスニングはなかった。ミシガンのテストのほうは別のあるリスニングテストがありましたけれども、留学するためにこのしか使いませんでした。TOEFLはミシガンとの大きい違いは、リスニングの部分も入って、さっき三つの種類を挙げましたね。一つは、一つの文を聞いて、それから、同じ意味、または質問だから、正しい答えを当てましょう、を選んでくださいという。この「Mary swam out the island」だったら、…?…するんですね。それから、テストとしての中はA, B, C, D, チョイスだけ出したんですが、その「Mary swam out the island」。Cが正しいですね。次はダイアログに関しては、二人の声、一人だけではできませんけれども、初めは大体男と女の会話ですね。それから、3番目の声は質問する。この部分は全部英語で聞いて、それから、テストとしての後はチョイスだけ。それから、2番目はWomanの「I think she would like to have a photograph of our class」。それから、クエスチョンは「What does the woman think the class should do?」。Aの「Present professor Smith with a picture」が正しい答えになる。それから、リスニングの、これは1976年からの種類です。やっぱり短いアナウンスメント。後は説明ですね。次のテストの中は二つ間違いがあるんです。この「Balloon」は「s」はつけたほうがいいですね。「Balloons have been used for about a hundred years, There are two

different kinds of sport balloons, gas and hot air. Hot air balloons are safer than gas balloons which may catch fire. Hot air balloons are preferred by most balloonists in the United States because of their safety. They are also cheaper and easier to manage than gas balloons. Despite the ease of operating a balloon, pilots must watch the weather carefully. Sport balloon flights are best early in the morning or late in the afternoon when the wind is light」。もうこれ聞きますね。テープから流します。問いのもう一つのほうは「Why are gas balloons considered dangerous?」。それから、テストブックレット (Test Booklet, 問題冊子) の後はチョイスだけです。それから、B, 「They may go up in flames」。そういうチョイスは正しい。リスニングはこの三つのセクションだけになりますね。それから、このミシガンテストと違う文法の問題もありました。これは韓国の日本語の試験とよく似てますけれども、アンダーラインの部分はどっちのほうは間違いということで、それから、この場合は「a thin lens keeps」。これは「s」をつけたらいけない。正しいチョイスはCですね。間違った部分はCの「keep」です。それから、後の語句の問題は先に見たミシガンテストと同じかたちですから。それから、この例というのは全部 Bachman の本から取りました。ビブリオグラフィ (参考文献) で見ると出ています。それから、今からのことです。今まではこのような試験がありました。でも、今からどのような試験の内容ですか。「トーフル 2000」のことをちょっと。もちろん試験はまだやってないんですけれども、まだ開発しないですけれども、でも、ETS のほうは、Educational Testing Services (ETS とは、Educational Testing Services の略称) 教育のほうはいろんな研究をする。この試験を開発するためにいろんなことを調べました。この研究レポートなんかを読んで、このようなことが分かりました。一つの試験、「トーフル 2000」の問題冊子のフォームのことについてちょっとお話をしたいんです。初めのほうは、現代のコミュニケーションのモデルとテストする試験問題を作った。考えると、もう TOEFL が始まったころは、40 年前の TOEFL のモデルとはやっぱり違うんです。もう、「This is a book」のような。コミュニケーションは言動中心が本当です。でも、今はコミュニケーション・コンピタンス・モデルになりましたから、この試験はこの新しいモデルの区別しかないとよくないから、第1の目的を定めました。それから、2番目のほうは、今までは TOEFL はマルバツのかたちでしたが、これだけじゃなくて、もちろんマルバツの部分は多分なかなかなくならないと思うんですが、でも、やっぱりブランクの空白を入れるとことか、または直接書く力、ダイレクト・テスト (4 択から回答を選ぶ間接的な回答方法ではなく、受験者が生み出した実際の会話や記述につき直接採点する方法のこと)、受験生は英語で書く、または今までの時と一番大きい違いは、スピーキングの間違いも直接は試験では調べないんです。でも、最後の部分は、話す力、ダイレクト (マルバツ方式でなく、直接に) ではかること、一番その時間、ネックになった

そうです。今まではこのような試験はとても少ないから、前の例は少ないから、根本な
んですが、もうゼロから開発しなければならない感じのことですから、とても大変なこ
とだと思っんです。それから、3番目のほうは、今まではスキル別のものでしたね。大
体文法は文法だけをはかる試験。それから、語彙の試験。または書く試験もそうですね。
書くだけの、TWE, Test of Writing English は書くことだけです。けれども、新し
い試験のアイデアは、やっぱり、大学生が使う英語のような問題を出したいんです。一
つのポシビリティ (possibility, 可能性) は大体何か聞いて、それから Summery (要
約) を書くことね。やっぱり聞く力と書く力を合わせて一つの問題になることはいいな
と思っんです。この、三つの目的あるということ。そうするとこの試験は変わると
思います。40年前、私が大学院の時代の留学生と今の留学生、米国の大学に必要な英語
は変わってないと思っんです。やっぱりレクチャー聞くことと、やっぱり英語を書くこ
とが。もうこれは変わらない。けれども、その能力をはかる方法はもう変わって、もう
今からもう一回変わるんですから、やっぱりこの試験を見て、それから、日本でおこる
英語教育は変わらなければならないかなど。私が一番お願いすることは、もう今までの
英語教育ではなくて、やっぱり未来のために、やっぱり、10年先、20年先の留学生のこ
とを考えて、必要な英語能力を教えて、それから、もう、今までのような日本人の留学
生は自由に外国へ行って、いろんなことを学ぶことができると思っんです。私の希望で
す。私はもう40年間、英語を教えました、方法は余り変わらない、この40年間。でも、
今からちょっと変わらないと、ちょっとどうかなと心配なんです。私の心からのお
願いであります。英語教育が変わるようにお願いします。どうもありがとうございました。

司会 スラッシャー先生、どうもありがとうございました。それでは、続きまして最後の
講演になります。「ヨーロッパの言語テスト」というテーマで国語研究所の杉本明子が発
表いたします。お願いします。

「ヨーロッパの言語テスト」杉本 明子 (配布資料 : p. 27~30)

杉本 国立国語研究所の杉本でございます。よろしくお願ひいたします。今スラッシャー
先生がTOEFLとかTSE (Test of Spoken English) についてお話をくださったんで
すけれども、私自身も十数年前、TOEFLを受けまして、これはアメリカの大学に留
学するためでした。また留学後、TSEも受けました。アメリカの大学院生、特に留学
生は奨学金を得る、授業料を免除してもらうために、ティーチングアシスタント (TA
ともいう) という助手の制度があるのですが、TAを得るためにTSEを受けるんです
ね。アメリカ人は英語が母語ですから、授業で英語が上手に話せるということは当然で
すけれども、留学生の場合ですと、やはり英語がアメリカ人にとっては分かりやすく話
せるかどうかということが分からないので、TSEを受けなければなりません。300点

満点だったんですけれども、イリノイ大であれば230点以上取れば、まああなたはT Aとして認めてあげましょう、という資格があるので、私も含めて留学生たちはT S Eを受けました。そのことが懐かしく思い出されました。これまでの発表では、日本人の文章力、外国人の日本語力、韓国ビジネスマンの日本語力、日本人の英語力という観点から、日本人とか日本語能力を中心にお話していただきましたけれども、私の発表では日本語・日本人から少しヨーロッパのほうへ飛びまして、近年のヨーロッパの言語テストの動きについてお話しし、ヨーロッパの言語テストで想定されている言葉の力とは何かということについて考えてみたいと思います。現在、ヨーロッパでは、ヨーロッパ諸国の様々な言語テストを比較する共通枠組みが作られています。その共通枠組みにおいて、各々のヨーロッパの言語テストの位置づけが明確にされています。この枠組みをつくる中心的な役割を担ってきたのがヨーロッパ言語テスト協会です。このヨーロッパ言語テスト協会は、ここでA L T Eと書いてありますけれども、The Association of Language Testers in Europe、その頭文字を取ってA L T E。頭文字をヨーロッパのほうはアルティーというふうに発音されているようですけれども、そのA L T Eが中心的な役割を担ってきました。そのA L T Eというのはい体どういう機関でしょうか。A L T Eはどのような経緯で創設され、どのような目的を持っているのでしょうか。また、A L T Eが作成したヨーロッパの言語テストの共通枠組みとはどんなものなのでしょうか、その共通枠組みで構成される言語能力のレベルはどのようなものなのか。私の発表ではこのようなことについて話したいと思います。A L T Eは、ヨーロッパにおいて、各国、また、各地域の母語として話されている言語テストを作成し、また、実施している、そして、合格証明書を発行している機関の共同体です。そのA L T Eの概念というのは、1989年にCambridgeとSalamanca大学によって考案されました。最初の会議が開かれたのは1990年だったんですけれども、その会議には8機関が参加しました。しかし、その後、参加機関が増え続けていきまして、現在では27機関が加盟している、とのこと。お配りしたハンドアウトの27ページを御覧ください。表の1がありますけれども、この表1にはその27機関と、それぞれの機関が対象としている言語がリストアップされています。その表1の右側の欄に書かれているのが、それぞれの国の言葉で書かれているので、ちょっと読みにくいと思いますが、そういういろいろな機関がA L T Eに加盟しているわけです。そして、その左側に書かれている、これは日本語というか、カタカナで書いてありますけれども、バスク語、カタロニア語、デンマーク語、オランダ語というふうにありますけれども、それらがそれぞれの機関が対象としている言語です。例えば対象言語になるのは、上から5番目、英語とありますが、その5番目の英語を対象としている機関というのは、その隣の右側のほうを見ますと、University of Cambridge E S O L Examinations だということが分かります。英語に関してはこのUniversity of Cambridge E S O L Examinations が扱っているわけですが、例えば左四

つ目のオランダ語に関しては、オランダ語の発音に自信がありませんので、オランダ語のスペルは読み上げませんけども、そこに短く書かれている頭文字のところだけ読んでみると、C I T Oというイニシャルが書かれていますね。その機関と、もう一つ、下に書かれているC N a V T、つまり二つの機関がオランダ語のテストに関わっているわけです。もちろんその二つの機関で協同してテストを作っているというのではなくて、やはりオランダ語でも、どのような目的で能力を見るかによって機関が異なっているということです。それでは、このようなヨーロッパのテスト機関の連合体、A L T Eですけども、どうして創設されたのか、A L T E創設の経緯についてお話してみたいと思います。第二次世界大戦以降、ご存じのようにヨーロッパ諸国は、共通の外交・安全保障、および、経済・社会・文化・科学の発展のために結束する方向で歩んでまいりました。1987年に単一欧州議定書を発行し、1993年には欧州連合条約が発効しました。これによってEU市民はEU諸国内での自由な居住、学問、労働、開業などを保証されるようになってきました。そうなりますとヨーロッパにおける政治、経済、文化の交流は当然ながらますます活発になってきたというわけですけども、その際に立ち上がったのが言語の壁だったわけです。ヨーロッパは国や地域によって様々な言語が使用されていますけれども、このように政治、経済、科学などの交流が活発化いたしますと、お互いの言語・文化を理解して、コミュニケーションを円滑に行うということが重要な課題になってきます。特に労働者がヨーロッパ内で自由に移動して職を得られるようになりますと、当然、国家間を移動する機会が多くなります。そうすると、雇い主側、要するに雇用者側にとって、外国人労働者が本当に仕事ができる言語能力を有するのかどうかということが非常な関心事になってくるわけです。そうしますと、履歴書を出す段階で、私はこれとこれの言語テストの証明書を持っています、というように書くわけなんですけれども、そうするとそのような証明書が、特に重要になってきました。しかし、A L T Eが発足するまでは、各国・各地域で個別に言語テストが実施されて証明書が発行されていたので、それぞれの証明書が何を意味するのか、どの程度の言語能力が保証されているのかが分からないという状況にありました。こうしてヨーロッパ諸国・地域で個別に発行されていた言語能力の証明書を比較するという必要性が認識されるようになってきたわけです。つまり、雇用者側といのは、採用の募集の段階で、こういう方、こういう条件の方を募集しますという広告を新聞に掲載するわけなんですけれども、その際、こういう資格を持った方、言語能力の証明書として、これとこれを持った方というかたちで募集するわけですが、言語能力の証明書としてどういう証明書を要求すればいいのかということがよく分からない。また、労働者にとりましては、自分の言語能力を診断し、自分が応募したい会社が、これこれの言語能力の証明書が必要ですよというような、条件を出しているのであれば、自分自身で、言語能力を高めていかなければいけないわけですから、今後必要な訓練を見極める必要があるわけです。このような状況

から異なる言語テストというものを比較・対照する必要性が出てきて、そのための共通枠組みが必要になってきたというわけです。このような経緯からALTEが創設されて、加盟国が協同で異なる言語テストを比較する枠組みが開発されてきました。ALTEの目的としては次の三つがあります。まず第1に、様々な言語テストの証明書を比較するために、言語の習熟度の共通枠組みを確立するという目的があります。このためにALTEが、まず、同じようなテストングを使い、各言語テストの特徴というものを比較しました。その特徴の比較ですけれども、教育・ビジネスにおける資格としての認定のされ方、でありますとか、異なるスキルの相対的重要性は、どの程度のものなのか、また、各試験問題で照準としていることは何か、また、その試験問題の採点はどのようなものかなどの観点から、お互いにいろんな言語テストを比較し、それによって、互いに相対的位置づけを調整するということを目的としました。2番目の目的としては、言語テストの作成過程の段階についても共通基準を確立することでした。言語テスト作成の段階ですけれども、テスト課題・項目の作成、テストの実施、テストの採点・評価、テスト結果の報告、テストの分析と結果の報告等がありますが、すべての段階において、各国の言語テストの実施団体間で共通の基準を設定することを目的としました。次に、三つ目の目的といたしまして、国際的な共同プロジェクトを実施し、お互いに様々なアイデアやノウハウを交換するというようなことが目的とされました。国際的な共同プロジェクトとしては、内容分析チェックリスト・プロジェクトとか、アイテムライター・ガイドライン・プロジェクト、言語能力の測定プロジェクトなどがあります。内容分析チェックリスト・プロジェクトというのは、様々な言語の試験内容を比較・分析できる、そういう方向を開発していくプロジェクトです。アイテムライター・ガイドライン・プロジェクトというのは、テスト問題を作成する人たちのために作成基準を作るプロジェクトです。アイテムというのは試験項目、ライターというのは書く人ですから、アイテムライターというのは、試験問題を作成する人たちという意味で、このような基準でテストを作成するといひようですよといひような、基準をつくるプロジェクトです。言語能力の測定プロジェクトというのは、これからお話しいたしますが、言語能力のレベルを、レベル1から5に分けて、各レベルでどのような活動ができるのかというのを記述するプロジェクトです。それでは、ALTEの言語テストの枠組みとはどのようにして設定されているのかについて述べたいと思います。ヨーロッパの言語テストを比較する共通枠組みというのは、ALTE Framework というふうには呼ばれていますが、このALTE Framework が、お配りしたハンドアウトの29ページの表に写してあります。これを見ていただくと、レベルというのがあります。このA1, A2, B1, B2, C1, C2というレベルが、言語テストの能力別のレベルを表します。一番左の上のほうにLanguage, 言語というのがありますが、ここにそれぞれの言語が並んでいるわけです。それぞれの言語について、例えばA2に相当するレベルの言語テストという

のはどういう内容か、B 1に相当する言語テストというのはどういう内容かということが分かるように示された表です。ではちょっと例を挙げて見ていきますけれども、例えば上から四つ目に English, 英語というのがありますけれども、この英語テストにおいては、レベル1に相当するのが Key English Test で、カッコしてKETとありますけれども、レベル1です。レベル2に相当するのはPETです。同じようにレベル3, 4とありますが、レベル5に相当するのがCPEです。これは英語の中の縦の関係なんですけど、次に横の関係を見てみますと、例えば、英語とフランス語を比較するとどうなるかを見てみます。レベル1に相当するのがフランス語ではCEEP1と想定されておりまして、レベル2に相当するのがCEFP2, レベル5に相当するのがDHEFこういう対応関係が想定されているわけです。ですから、ある外国人労働者の履歴書に、英語のCPEとフランス語のCEEP1を持っていますというふうに書かれていた場合に、雇用者側は、どの程度のレベルの英語力、フランス語力があるのかということがこの表を見れば分かるわけです。今の例ですと英語はレベル5の言語能力を持っているんだな、フランス語ではレベル1の言語能力を持っているんだなというようなことが分かるわけです。また、雇い主、経営者側が、英語ではFCE以上を要求します、フランス語ではCEEP2以上の合格証明書を持っている人を募集しますなどということも広告に出すことができるわけです。それでは、今レベル1とか2とかいうふうに御説明いたしましたけれども、そのレベル1, 2, 3, 4, 5というのは、それぞれどのような言語能力レベルというのを想定していて、どのような言語活動に参加することができるのか、その共通の枠組みにおける言語能力レベルというものについては、お渡ししたハンドアウトの30ページの表3に記してあります。この表で大体AとかBとかがついて、それぞれについて1, 2, 1, 2とがありますけれども、そのA1, A2というのが大体初級レベルに相当し、B1, B2が中級レベル、C1, C2が上級レベルに相当します。ちょっと詳しく表を見てみますと、例えばA1というのは、レベル1よりも下、つまり、入学期のレベルに相当するというわけですが、A1では、聴く・話す、読む、書くではそれぞれどのような言語能力が想定されているのかというふうに見ますと、まず、聴く・話すですけれども、基本的な指示が理解でき、基本的な事実に関する会話に参加できる。読む能力に関しては、基本的な通知・報告、指示、情報が理解できる。書く能力に関しては、簡単な書類に記入したり、時間、日付、場所を含むメモをすることができる。このような能力が想定されているわけです。ですから、ある受験者がALTEのA1の英語の試験に合格したとすると、この人は大体聞く・話す・読む英語に関してはこの程度の能力があるんだということ、このようなことはできるんだということが大体分かるわけです。今、聴く話す読む書くというところでA1というところを横に見ていきましたけれども、じゃあ、聴く・話す・書くというところで、レベルごとにどのような違いがあるのかということについて、A1からずっとC2まで上がって、簡単に見

ていきますと、A1はもう見ましたから、A2ですね。A2はレベル1に相当していますが、日常的な場面で、簡単な意見を述べたり、要求をすることができます。B1、すなわちレベル2では、抽象的・文化的なことについて、限定的ではあるが意見を言うことができます。また、既知の領域で助言ができ、指示や公的な報告が理解できる。B2、レベル3では、よく知っているトピックについて理解し話すことができます。また、かなり広い範囲のトピックに関する会話についていくことができます。C1、レベル4では、自分の仕事の領域において会議・セミナーに効果的に貢献することができます。また、抽象的な表現を用いて流暢に話し、因果関係の流れを含む会話についていくことができます。C2、レベル5では、複雑で繊細な問題について助言したり話したりすることができます。また、話し言葉での参照・引用を理解でき、敵対的な質問に対しても自信を持って回答することができます。というようなことが想定されています。御覧になって分かりますように、下のレベル1からレベル5と上がっていきますと、簡単で日常的な話をする、受け答えができるという能力から、だんだん非日常的事物まで含めて、いろいろなことに対応できるようになり、しかも、非常に複雑であったり、繊細な問題にも対応する言語能力が発達していく。そういうことを想定しているということがこの表から分かります。今御説明いたしましたのは、実は一般言語能力の共通枠組みで想定されている言語能力の推定でした。しかし、実は言語テストの共通枠組みの種類は、一般的言語能力だけではなくて、職業の言語能力とか、学問の言語能力とか、社会文化の言語能力という、共通枠組みもあるわけです。職場の言語能力では、ビジネスに関係した活動に関する言語能力がそれぞれのレベルで想定されていますし、学問の言語能力では、教室場面や、教育に関わる言語能力などが想定されています。ビジネスの場合は、相手との電話で話をする場面ですとか、教育の場合は、コンピュータや、図書館の使い方に関する説明文を読む場面などが枠組みになっています。社会の文化の言語能力ですと、旅行、日常生活、スーパーマーケットや、料理教室などに関するものを読むことができるというように、生活に密着した言語能力というものが共通枠組みの中で想定されているわけです。以上、ヨーロッパのALTEという機関での共通枠組みについてお話してまいりましたが、けれども、このようなことからヨーロッパの動きを含めて次のようなことがいえるのではないのでしょうか。ヨーロッパ諸国というのは、単一言語、単一文化というものを持っているわけではなく、多言語、多文化の中で人々は生活を送ってきました。多様な言語文化の理解と、いろいろな言語での相互理解と、欧州市民同士のコミュニケーションを円滑に行っていくということが重要になってきて、そのために言語学習とか、教育の改革・支援が重要な課題として取り組まれてきました。ヨーロッパの共同機関というのは、いろいろあるのですが、その中の一つの機関として、ALTEはヨーロッパの多言語政策を推進するための中心的な役割を担ってきたと言えると思います。ALTEというのは言語テストの共通枠組みだけではなくて、先ほども言ったように、いろいろな

プロジェクトというのも行っており、その成果というのは今後私たちが日本語力や、日本語能力テストについて考えていく上で、新しい視点を与えてくれるのではないかと思います。今日、いろいろな言語テストについてお話を聞いて、大変勉強になったんですけども、今日だけでも日本語に関するいろいろなテストというのが出されていて、日本語の文章力能力検定、日本留学試験、韓国のビジネスの試験といろいろありますけれども、日本語能力をはかる試験だけでもたくさんあります。それぞれの日本語能力試験がどのような能力を見ていて、それぞれのレベルが、どういう能力を想定しているのかということが、実は本当は明確になっているかどうかというところは、よく分かりません。ALTEの中での、ヨーロッパの中の言語の比較ということも非常に大事ではありますけれども、でも、日本語能力試験の間での、共通枠組みの中で、それぞれの日本語能力試験を位置づけるということもまた大切なのではないかと、というふうに思います。それと同時に、去年、ケンブリッジ大学のヨーロッパのテストを作っている機関を訪問させていただいたときに、Association of Language Testers in Europe、アジア版で、ALTA、Association of Language Testers in Asia、言語テストの共同体、そういう共同機関をつくったらどうか、という話もありました。すなわち、アジア、今日は韓国の李明姫先生も来てくださいましたけれども、韓国や中国、日本も含めてアジアのいろんなテストの共通枠組みということについても、今後考えていく必要があるのではないかと思います。私の発表は以上です。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。それでは、これから4時まで質問コーナーに入っていきます。ちょっと机の配置をいたしますので、しばらくそのままお待ちください。

【質疑応答】

司会 たくさんの質問をお寄せいただきましたが、ここではお一人の講師に一つということで、絞って取り上げさせていただきたいと思います。まず、最初に樺島先生への御質問等がありますので、その御質問を紹介いたします。話し言葉の中で説得力のあるストレス、強弱の置き方について知りたいという御質問です。会場にいらっしゃいますか、この御質問をお寄せいただいた方。これでよろしいでしょうか。では、樺島先生、お願いいたします。

樺島 説得力というのは、例えば話し手、書き手が言おうとする内容を読み手、聞き手に納得させることですね。納得させる上で大切なのは、まず、しっかりした根拠があるということで、それは事実に基づいてものを言う、そして、論理的に話を言ったり、書いたりして、はじめて説得力というのが生じるものですね。そうした強く言ったり弱く言ったりするということは、強く言ったことを印象に残すことはできても、それによって説得力が生まれるということは絶対にはないですね。ストレスによって説得力をつけるということはありえないというのが私のお答えです。

司会 ありがとうございます。それでは、続きまして西原先生への御質問と思われるところ
ろです。紹介します。私は人の話を集中して聞くのが苦手で、会議などで聞きもらして
しまいます。聞く力をつけるのにはどうしたらいいのでしょうかという質問です。会場
にいらっしゃいますか。これでよろしいでしょうか、この質問で。では、西原先生、お
願いします。

西原 結論から先に申し上げますと、できる限り予習をして、心構えをつくってから聞く
ということではないかと思えます。もう少し詳しく申し上げます。よく私たちは選択的
注視をしています。これは選択して注意をするということなんですけれども、例えば、
おなかが空いているときにはどうしても食べ物のほうに目がいってしまうとか、それか
ら、自分が心配事があるときには、その心配事の枠組みの中で他人の話聞いてしまう。
つまり、皆私の心配事という枠組みの中でのみ解釈するようになるというのがある、私
たちがものを言うとき、こういうふうにしがちだということです。そうなってしまうと
いう悪い結果のほかに、仕組んでそうすればいい結果を生むということになります。話
というのは、「一体何の話？」ということもちゃんとわきまえて聞かないとなかなか分
からない。これは言語学で文脈とか、それから、別の領域で「スキーマ」とかいうわけ
ですけれども。集中して、あるいは話を分かると思ったら、どういう話、それから、ど
ういう骨子、そして、どういう領域とかいうことにあらかじめ構えをつくって、それか
ら聞きはじめるということ、なるべく自分自身を訓練してなされると話が分かりやす
くなるのではないのかというふうに思えます。これは、例えば今は聞くというお話でした
けれども、いわゆる理解行動ということに関しては、聞くだけではなくて、読むという
場合でも、それから、相手の気配を察するという行動、つまり、何か自分が向かって
コミュニケーションされたときに、それを理解する行動というところでは皆同じことな
のではないかと思うんですね。いろいろな心理的な実験もそれに伴ってありますけれど
も、文脈なしに語られたことというのはほんとに分からないということだと思えます。
ですから、その文脈の中に自分も入れるということを行うと分かりやすくなるという
のが一般的なことかと思うので、そのことについて、聞くということにも少し自分自身の
訓練をなさるといいかなと思えます。

司会 ありがとうございます。今のでよろしいでしょうか。御質問のほう、何かありま
したらどうぞ。

参加者 1 あらかじめ原稿だとか、それから、どういうこととか、あらすじとかを聞いて
おいたほうがいいんでしょうか。

西原 できればそのほうが効果的だということですね。例えば講演ですと、例えば今日の
「ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？」ということで、ある枠組みというのが設定
されていますよね。そのことの中で、例えば自分が理解したいと思うのはどういうこと
なんだろうか、あるいは、どういう話になるんだろうかということはそれで推測できる

と思うんです。先ほど、留学生に求められる能力の中で、推論能力というようなことを言いましたけれども、例えば西原が話しはじめたら、一体その次にこの人はどういう話をするつもりなのか、ズバリこの人はどう言っているんだろうかというようなことを、個人自身が枠組みの中で推論しながら聞くというか、理解しようとするということで、あらかじめテキストはなくても、聞きながら焦点を合わせることができるというふうに思います。そのときに、例えば、どうしても眠くてしょうがないときに、集中しろとか言われるととても困るわけですが、そういうときには、例えば手を動かしてメモを取ることで推論能力を持続させようとか、いろんな工夫はもちろん個人々々でできると思いますけれども。

司会 ありがとうございます。よろしいでしょうか。それでは、これは李先生にお答えいただいたほうがいいかなと思われる御質問です。国際会議でも日本人の討論への参加が消極的なことが見受けられます。英語力不足、例えば言えない、聞けない、それから、論理力不足、意見が出ない、参加意欲、変な意見を言って周りにばかにされたくないなど、すべてが要因だと思いますが、この辺りのお話を聞ければ幸いですという御質問です。会場にいらっしゃいますか。そういうことでよろしいでしょうか。はい。じゃあ、李先生、お願いいたします。

李 こういう場合は韓国も同じ問題になっているところだと思うんですけれども、例えば英語力不足とか、論理力不足とかいうところはほぼ韓国人も日本人もありうるところだと思います。東洋の感覚から見るとですね。3番目の、バカにされたくないという意識が働いているというところですが、例えば英語力が同じ韓国人と日本人ということ仮定してみると、こういう会議のときに意見をという場合になると、割と韓国人のほうが、ちょっと物事をはっきり言うタイプです。そういうところは少し、でも、日本人の場合には配慮という気持ちがあるんでしょうか。目立つのをちょっと気にしているタイプなので、そういう民族性もあるし、韓国の場合には割とそういうところではちょっとはっきり言うタイプなので、そういう場合は国際会議ではちょっと有利な面もあるんじゃないかなという個人的な考えは持っているんですが、いかがでしょうか。私は日本で韓国語を教えた経験があるんですけれども、ヨーロッパとかアメリカからの学生の場合には、私の韓国語の講座ですごく質問をするんです。講義ができないほど質問をよくするんです。自分が分からないということをはっきり言うんですよ。そうすると、その学生はすごく韓国語の学習力は上がってきているということがいつの間にか分かったんですけれども、割と東洋的な感覚から、目立つように、物事をはっきり言うように、そういう訓練をしていったほうがいいのかなという考えです。

司会 いかがでしょうか。

参加者 2 仕事柄ですね、というのは、韓国人とか中国の人とビジネスをしているんですけど、圧倒的に日本人が弱くて、同じ英語の能力でも韓国人とか中国人のほうが…？…

通じているようなんですけどやっぱり最後のそこら辺ですかね。

李 はい、そういう原因からではないかと私は思っておりますけれども。

司会 それでは次に、言語能力に関する御質問ですから、これはスラッシャー先生にお答えいただいたほうがいいかと思われま。質問を読みます。TOEICなどがそうですが、読解、聴解力試験だけでは作文、会話力を推しはかれないことがあります。言語能力の四つの側面、読む、聴く、話す、書くは相互にどれくらい依存しているのでしょうか。言語学的見地から言及した研究などはあるのでしょうか。可能ならば御回答くださいという御質問です。会場にいらっしゃいますか。こんなところでよろしいですね。はい。では、スラッシャー先生、お願いします。

スラッシャー 多分ある程度は、先のプレゼンテーションのなかで答えたところがあると思うんですが、特に「トータル2000」のことを見ると、やっぱりもう4 skills (読む・聞く・書く・話すの四つの技能のこと) ですか、ダイレクトに (直接的に) はかるような試験は作りたいから、今までのTOEICだけじゃなくて、TOEFLもそうだし、ぼくの試験も同じですが、やっぱりマルバツのかたちでプラクティクな面ではかることはできないから、これは一つの相当大きい点です。でも、さっきプレゼンテーションの中で言いましたけれども、英語能力も目的によって違うんです。ある程度は目的を考えて、4 skills の中で一番必要とか、あんまり必要じゃないと決めることができますが、個人の例を挙げると、私は昭和22年にはICU国際基督教大学にいましたけれども、あのときは大体事務員からとか、図書館の人とか、全部英語と日本語両方出ました。今は沖縄が日本に戻ったから、日本語ばかりになった。やっぱり私の日本語の能力は足りないなともう分かった。場所によって、目的によって、どっちのほうが必要ないということはあるんですけど、でも、本当の英語能力はとなると、全部、4 skills 全部必要です。

司会 ありがとうございます。御質問なさった方、追加してお聞きになりたいことはありますか。それでは次の質問に入っていきたいと思えます。これは杉本さんにお答えいただきたいと思えます。ビジネスや留学は大人になってから、あるいは高校生以上になってからの問題のようにも取れますが、実際、子育てをしておりますと、言葉の力を磨くためには小さいころからの言語教育が大切ではないかと思えます。大人になってからの社会生活や職業に役立つ言語力を育てるために、学童期からの教育はどのようなものでよいのか、その辺りを示唆いただけるとありがたいですという御質問です。会場にいらっしゃいますか。はい。じゃあ、杉本さん、お願いします。

杉本 脳の発達の観点からお話させていただきたいと思えます。大人の場合ですと、脳のどの部分の領域がどのような能力をつかさどるかということはもうほぼ確定されています。例えば、左脳のこの部分は読み書き能力であるとか、言語を理解する能力であるとかいうことはもう決まっていますし、右の脳のこの部分は空間認知に関わる部分である

というように、どのような脳の機能がどの場所に対応しているかということは確定しているわけです。しかしながら、実は人間は、赤ちゃんとして生まれたときには、まだそのような脳の機能、すなわち、どの部分がどの能力に関わるのかということが全く決まっていないうわけです。それが徐々に大きくなって発達していくにしたがって、だんだん脳の機能とその場所というのが確定していきます。これを脳の側化といいます。大体それは11, 12歳ごろぐらい、その前後ぐらいに決まるというふうに心理学の研究では言われています。この11, 12歳前後というのが実は臨界期というふうにいわれておまして、11歳前ですと脳は柔軟ですから、言語を獲得しやすいわけです。けれども、それ以降ですと、例えば私たちが中学校になって英語の勉強を始めた場合に、私自身そうでしたけれども、英語は学ぶのがなかなか難しいという経験をされた方もいらっしゃると思いますけれども、11歳前後以降ですと言語学習は難しい。それは脳が側化してしまった後だからなんですね。ただ、これに関していろいろな研究がありまして、その中で言われていることは、11, 12歳以降でも文法とか読解に関する能力に関しては、それほど学ぶのに支障がない。それに対して、11歳以前でないとうまく獲得できないといわれているのは聞く力だそうです。やはり、本当にネイティブ母語話者のように上手に発音し、母語話者のように聞き取るというような、能力を獲得するためには、やはりその言語を11, 12歳以前に学ばなければ難しいのではないかというような結果も出されています。そのことから考えますと、日本語力、英語力も含めまして、児童期にはただ単に読むとか書くだけではなくて、バランスの取れた言語学習の機会、すなわち、聞く・話す、読む、書くに関する様々な活動を行う機会を持つようにすることが大切なのではないかと思えます。

司会 今まで何か関連して御質問がおありでしたら、ここで挙手いただけると。どうぞ。

参加者3 発音が良くなるには幼児から、幼稚園からやるのが大切なんですか。私もアメリカに、ニューヨーク大学の…?…留学したんですけど、授業料が高くて、途中で…?…アメリカの大学はちょっと授業料が高すぎるということで…?…

司会 では、私からちょっと。今杉本さんがおっしゃった、ネイティブと同じように聞き取る、ネイティブと同じような発音をできる、そういう力のことをおっしゃいましたが、それが大人になってから得にくい力だそうです。ランディー先生、関連して御質問、よろしいですか。ネイティブと同じように聞き取ることができる、ネイティブと同じように発音することができるという力は、日本人と米国の話者の方の場合に、どれぐらいコミュニケーションに役立つもののでしょうか。それは異質のものなのでしょうか。

スラッシャー コミュニケーションのためにあんまり、もちろん特にひどい発音になるとコミュニケーションに問題があるんですが、やっぱりジャパニーズ・アクセントの場合にはコミュニケーションの邪魔にならないです。彼と話して、あつ、彼は日本人だ、と分かるようなことだけですね。ネイティブのような発音になることは、ある人は多分必要

かもしれないんですけれども、コミュニケーションのために、分かる発音だったら十分と思うんです。けれども、本当のネイティブのような発音が必要だったら、12歳までに英語を学ばないと、英語だけじゃなくて外国語を学ばないと、ネイティブのような発音はなりにくいです。小さいときからずっと外国語を使うとネイティブの発音ができるんです。でも、私のような、22歳で初めて日本語にぶつかったような者は、長くなってもやっぱり外人なまりがあるんです。もうしょうがなくて、子供のときは日本が戦争の相手でしたから、日本語を勉強することは考えなかったから。けれども、やっぱり発音は、意味を示すための発音があれば十分です。アクセントはあるんですが、特に悪いことではないんです。私の大学時代はヒットラーから逃げた先生が多かった。特にドイツから来た先生のクラスの中は、ドイツ語なまりを使いました。やっぱりドイツの学者というイメージを示すために。でも、クラスの後には、face to face（個人的に、という意味）を話したときは、あのなまりはほとんどなかった。それと、やっぱりなまりは意味がある場合もあるんです。

司会 ありがとうございます。ちょっと時間が過ぎてしまいました。今日は長時間にわたって「ことば」フォーラムにおつきあいいただきまして、本当にありがとうございます。まだ御質問がおありの方もたくさんいらっしゃると思います。それで、菅井、それから、李先生、そして、杉本、この3人のレジュメの頭にメールアドレスがついております。メールでお寄せいただければと思います。それから、私ども国立国語研究所では電話によることばの質問を受け付けております。電話番号、書いてありますかね。代表電話にお電話いただきますと、すぐにお答えいたしますので、今日御質問の機会を差し上げられなかった方、どうぞお電話で御質問ください。よろしくお願ひいたします。では、最後にお願ひです。封筒の中に入っておりますアンケート、グリーンの紙です。ぜひともお出しいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。今日は本当にありがとうございました。これで終了です。

<終了>